

【論文提出者】 社会文化科学研究科 公共社会政策学専攻 公共社会形成論講座
共生社会論分野
岩淵 泰

【論文題目】 フランスの地方分権と参加民主主義

【授与する学位の種類】 博士（公共政策学）

【論文審査の結果の要旨】

岩淵氏の博士学位請求論文「フランスの地方分権と参加民主主義」は、フランスの地方分権の制度と実態について、主に参加民主主義の観点から分析したものである。

フランスの地方分権については、これまでは全般的にみると制度論の議論が中心になる場合が多く、制度の運用実態に迫る研究はまだ少ないという問題点を抱えている。さらに、分析視角として、分権と参加という視角が中心となり、地域住民の政治参加の観点から分権を検討するというのが一般的となっている。フランスの地方分権研究はこうした視点からの成果をこれまで上げてきたといえる。

こうした中で、岩淵氏の研究は、次の点で優れた成果を上げている。第一に、フランスの分権を参加民主主義の観点から分析するのであるが、とくに議員と市民の関係という視点を導入することによって、フランスの近年の分権改革の中で出てきた「近隣民主主義」や「近接性の原理」さらには「補完性の原理」などを住民サイドからだけでなく、地方議員サイドからも検討し、それらが地方議員のリーダーシップを強化しているという特徴を明らかにしていること、第二に、地方議員へのインタビューを数多くこなすなど、いわゆる「足で稼いだ」資料が多く、議員や行政関係者などの地方分権に関する率直な感想なども含めて、今日の分権状況を映し出す資料を駆使していること、この二点において氏の研究は大きな成果を上げており、同時にこれまでの研究に欠けていた住民一議員関係の視点からの地方分権分析と分権改革の実態分析を備えたものともなっており、ここに氏の研究の独創性を見ることができる。

論文は二部構成になっており、第一部は「地方分権」と題され、地方分権の歴史と現状を分析し、第二部は「参加民主主義」と題され、フランスにおける参加民主主義の現状を分析している。第一部は四章構成になっており、第一章「フランス国家と社会の変化」は平等という伝統的理念に近年「地方の自由」が加わったことが指摘される。第二章「フランス地方分権の歴史」ではドゴール、ミッテランによる地方分権改革が検討される。第三章では「バラデュール地方分権委員会」が取り上げられ、今日の地方分権改革の議論が地方議員の地位の観点から分析されている。第四章は「補完性の原理と近隣性の原理」が検討され、議員、市民、アソシエーションの関係に焦点が当てられる。

第二部も四章構成となっており、第一章「参加民主主義の思想的発展」では参加民主主義の議論が全体の利益と個人の利益のバランスという観点から検討される。第二章「代表制の危機とセゴレーヌ・ロワイヤルの参加論」ではフランスの近年の参加論が検討される。第三章「参加民主主義の制度化」では近隣民主主義も含めて、参加が議員の正統性の回復という観点から検討される。続く第四章「代表民主主義の質的転換」ではフランスの分権と参加を議員と市民の新しい関係の展開という観点から議論し、公共政策の作成・決定が両者の密接な関係によって行われることが求められているということが論じられる。

こうした氏の議論は、フランスの地方分権改革に関する新しい知見のみならず、地方分権を議員と市民の関係という観点から分析し、政策の正当性に関わるものとして議論するなど、政治学的にも新たな知見が示されており、博士（公共政策）にふさわしいものであり、合格と判断する。

【最終試験の結果の要旨】

1月18日に岩淵泰氏の論文に関する最終試験を行った(伊藤洋典、岩岡中正、鈴木桂樹、寺田徳光、徳野貞雄氏は当日欠席、後日岩淵氏と面談)。論文の論点に関する質疑応答という形で進め、岩淵氏に論文の狙いや独創性について回答してもらった。

論文の基本的な構図であるジャコバン主義—ジロンド主義の思想的対立や補完性の原理の射程、参加民主主義のフランス的文脈などについて特に質疑がなされた。氏の回答は、政治学の周知的知識を十分備えているものと判断されるものであった。

よって委員会は最終試験の結果を合格. と判断した。

【審査委員会】

主査	伊藤	洋典
委員	岩岡	中正
委員	鈴木	桂樹
委員	寺田	光徳
委員	徳野	貞雄